

飼料用米の地産地消システムをつくりました！

県央農林総合事務所

管内のJA石川かほくの直売施設「そくさいかん」では、地元産飼料用米の米粉で育った豚肉を平成24年7月から販売しています。「臭みが無く、甘みがある」と消費者の評判は良く、9月には公募により愛称が「豚輝（トンキー）」に決まり、売れ行きは上々です。

米粉で豚を肥育する取組は、平成22年、当事務所が管内のJA及び農家に飼料用米の生産と利用を働きかけて始まりました。当時、水稻農家は不作付け地の解消が、養豚農家は配合飼料の高騰と枝肉価格の低下が問題となっていました。

このため当事務所では、水稻農家に対しては①農業者戸別所得補償制度の活用、②条件不利地でも栽培しやすい作物生産の2点から飼料用米の作付けを推奨しました。また、養豚農家に対しては飼料用米の供給価格の試算や利用方法の調査等を行いました。さらに、JAの出資法人が粉碎機を導入し、飼料用米から米粉への加工及び農家への配送を受け持つことにしました。これにより、3者が連携した“飼料用米の地産地消”システムが完成しました。

現在、管内の飼料用米の作付面積は平成22年の2倍の140ヘクタールで、うち20ヘクタールは不作付け地を解消したものです。一方、飼料用米は養豚農家5戸、酪農家3戸で利用されており、飼料コストは、1日当たり豚1頭約500円、搾乳牛1頭約42円の削減につながっています。これは、年間3000頭を出荷する養豚農家において約168万円のコスト削減につながります。

JA石川かほくでは、今後も飼料用米の生産を拡大するとともに、畜産業への活用促進を図りたいとしており、当事務所でも引き続き耕畜連携を支援していく予定です。



米粉育ちの豚肉 “豚輝（トンキー）”



店内でのPR

問い合わせ先：県央農林総合事務所 農業振興部
(076-204-2101)